

地域クリエイター の履歴書

地域クリエイターの
探究家

朽尾 圭亮(とちお・けいすけ)

船井総研入社後、地域創造・活性化チームに志願し、創設に情熱を注ぐ。現在は、地域再生行脚100を実践し、成功事例を求めて全国を渡り歩く。

連絡先:keisuketochio@funaisoken.co.jp

『企業の将来はトップで99%が決まる』(船井幸雄)と言われるが、その企業体と同様に、地域にも組織を導くリーダーが存在する。あふれる情熱と哲学をもって、地域活性化に挑む地域クリエイターの本質に迫る!

第10回



六波羅 雅一

六波羅真建築研究室

大阪府大阪市

ヨソモノまちおこしのススメ!!



からほり商店街

まちおこしの成功条件とはヨソモノ、バカモノ、ワカモノである、とはよくいわれる言い回しである。確かに、我々コンサルタントをはじめ、外部勢力「ヨソモノ」を地域活性化の核とする場合は多く見られる。しかし実際のまちおこしには、その「始め」「途中」とともに「終わり」があることを忘れてはならない。我々、地域創造・活性化チームにおいても、最も意識するのは、「いかに地域の誇りを取り戻してもらおうか」と共に、その後「どのように外部の力なしに誇りを維持・発展させていってもらおうか」という点である。

今回、ご紹介する地域クリエイターは、その点で高い戦略をもってまちおこしに当たっている、大阪「からほり倶楽部」の創設メンバーである、六波羅雅一氏である。からほり倶楽部とは、大阪・中央区に位置する「空堀商店街」に、長屋を利用したショッピングスペース「萌（ほう）、練（れん）、惣（そう）」の設立や、商店街の三つの組織を巻き込んだ「からほりまちアート」、さらにからほり出身の作家「直樹三十五」の記念館建設などによって、町に新しい風を吹き込んだ団体として有名である。

では、六波羅氏はどのようにして、この空堀に新しい風を吹き込み、そして今、そのバトンをまちの人々に手渡そうとしているのか。今回の地域クリエイターの履歴書では、

この重要なテーマを、六波羅氏を中心としたからほり倶楽部が歩んできた軌跡とともに追ってきたい。

「地元魂」=「阪神ファン魂」??

今でこそ、胸を張って空堀を誇りに思うまちの人々。しかし、まちおこしの初期においては、必ずしもまちの人々が積極的であったわけではない。いや、むしろ消極的かつ冷めた見方しかできなかった、というのが事実である。では、どのように彼らは熱くなったのか。そこには、意外にも(??)阪神ファンの気質と共通する「可愛さあまって」の心理があった。

柄尾 今日、わざわざお時間をいただき、ありがとうございます。いやー、空堀地域はすごいですね。やっぱり大阪の方は明るいから、まちおこしにも積極的だったのでしょうかね。

六波羅氏 いえ、実はそうでもないんですよ。最初、まちの方たちは消極的、というかあきらめていた、というのが正直な感想でした。僕から見れば、この空堀は16年前にこの地に住み着いたときから魅力的でした。でもそのときに感じたのは、「もったいない」の一言です。

MSASAKAZU ROKUHARA CREATOR'S PROFILE

年代	出来事
1961年	大阪府 大阪市 誕生 高校では、ポスター作成などに興味を持ちデザイナーにあこがれる 数学が得意であったため、建築に興味に移り始める 大阪デザイナー学院 建築デザイン課 卒業
1982年	松野八郎総合建築設計事務所 入社 初期は主にマンション設計を担当。 徐々に、様々な地域をめぐり、日本文化と現代建築の融合を試みるようになる。
1988年	六波羅真 建築研究室 開設
2001年	からほり倶楽部 設立





直木三十五記念館

朽尾 もったいない…といますと？

六波羅氏 例えば長屋の格子をはじめ、この町には日本文化の粋を極めた素晴らしさがつまっているわけですよ。でも、まちの人はそれを見ても古い、汚いと思ってしまいますね。僕は、それをどうにかしたいと思っていました。もちろん、実際に提案するのは今から5年前でした。しかし、そういった素晴らしいと思った空堀の写真はもう16年前から取り続けていたんですよ。

朽尾 そうですか。せっかくそれだけの長所があるのに、正直もったいないですよ。なぜ、いいものがあるのに気がつかないのでしょうか。

六波羅氏 おそらくこれは、いいとかわるいの問題じゃないんですよ。例えば、ベビーカーやお年寄りが通ると仮定した場合、風情漂う石畳の道よりもアスファルトの道の方が格段に使いやすいんですよ。

だから、僕には提案することしかできませんでした。「僕はこの町がいいと思いますが、どうですか？」ってね。

朽尾 うーん、それでももともと消極的な人々を動かすのはかなり難しいことでしょう。そんな提案は受け入れてもらえませんよね。

六波羅氏 実はそうでもないんです。まちの人々の考え方は…。そうですね、例えるならば負け続けの阪神ファンの

イメージです。地元のチームとしてもものすごく愛着がある。だけど負け続けているから、しかも身内だと思っているから、ものすごく叩くわけです。でも、その力を一旦プラスの方向に変えてあげられればどうなると思いますか？ ものすごいパワーに変わるわけですよ。

まちおこしでは、そういった人々の思いをしっかりと酌んで上げることが大切だと思いましたよ。

誰もが賛成するまちおこしなんてありえない、でもみんなが参加することはできる

動き始めた空堀のまちおこし。しかし実際には、ここにもやはりまちおこしがかかる伝染病が待ち受けていた。その名は、「総論賛成、各論反対」である。しかし、それぞれの利害を汲み取った提案を行えば、地域は意外に一つにまとめられる、それが六波羅氏の考えであった。

朽尾 ようやく、まちおこしへの基盤がととのったからほりですが、それから先はもう順調だったんですよ。

六波羅氏 そうでもないんです（笑）。実は、提案はして

用語解説

からほり倶楽部

秀吉が大坂城を造った15世紀末頃、大坂城に外堀ができた。それが現在の空堀である。からほり倶楽部とは、この地に再び誇りを取り戻してもらうために以下の三つの目的を掲げて活動している。

- ①美しく歴史のあるまちの保存、再生
- ②イキイキした活力あるまちづくり
- ③新旧世代、文化の共生

同組織は、常に空堀地域の中心であり、からほり町アートや、直木三十五記念館、その他イベントの中心に位置している。

からほり町アート

歴史を背負った空堀の町の魅力をもっと多くの人々に知って、感じて欲しいと願い、からほり界隈を舞台にして芸術家の作品を展示するアート展。長屋の格子や建物の壁面、石畳の上、そのほかアーティストの多才な感性により思いもよらない空間に様々な展示される。既に5回を迎え、土日、両日でその入場者は1万人を越えている。

直木三十五記念館

直木賞に名を残す文豪直木三十五を記念する博物館。直木ゆかりの地である空堀に、市民の力で立ち上げられたのが、同記念館である。記念館は、商業スペースとして作られた「萌」の一部である。館内は、直木が晩年に設計した横浜の家をモチーフとしており、玄関を取り払い、内壁を黒一色にするなど、直木の視点をふんだんに取り入れている。



みるんですがやっぱり全員の方に賛成してもらうことはできませんでした。

栢尾 例の総論賛成・各論反対ですね。これほどこの町でもかかってしまう難病ですね。

六波羅氏 それでも、対応することはできるんですよ。例えば、今年5年を迎える「からほり町アート」ですが、これに反対される方もいました。しかし、その方が必ずしも他の施策、たとえばマップ作りに反対なわけではありません。それぞれの人にむけた施策を打てば、全体のベクトルは一つに統一されるんですね。

まあ、これはがむしゃらに動いた結果分かったことですけどね（笑）。

まちおこしの次のステージ

からほり倶楽部の将来、それは「解散」である。いつまでも外部の力を用いるのではなく、自分たちの力で誇りを高めていく、そうすることでこそ、まちおこしは真の持続力を継続できるのであろう。そして、六波羅氏の次のステージもまたその先にある。

栢尾 ところで、ここまでうまくいったからほり倶楽部で

すが、今後はどうされるおつもりですか。

六波羅氏 正直、これ以上のことは我々の組織でやるべきではないと思います。もう視察されたかと思いますが、この町に「直木三十五記念館」を作りました。この直木三十五は、ご存じ直木賞の作家で、映画監督でもあった方なのですが、実はあまり知られていないんですね。

地域の象徴、というか誇りである彼の記念館を建て終わったところで、まちの人々がこのまちに誇りを取り戻してもらうための活動は一応、一段落したのではないかと思っているんです。

栢尾 そうですか。しかしそういった記念館はお金もかかりますよね。現在は、からほり倶楽部がそういった運営等もしているとお聞きしましたが、それを町の自主性に任せるとは可能なんですか。

六波羅氏 まず、記念館ですが、よく言われるような、視聴覚室あり、休憩スペースあり、展示スペースあり、の大規模なものではありません。そこは、畳張りの一間で構成されていて、あるときは会議室、あるときは展示室、あるときは視聴覚室になるつくりになっているんです。大事なことは大きな記念館ではなく、まちの人の心に宿る象徴としての記念館なんですね。

あと、運営ですが、費用は「長堀町ストックバンク」と

いう企業組合があって、そこから企業寄付を募れる仕組みを作っているんですよ。まちの人々はもちろん、企業も巻き込んでみんなでまちの誇りを維持していってもらえれば、うれしいですね。

杵尾 六波羅さんご自身は、今後どのようになさるのですか。

六波羅氏 今までも、これからもそうですが、僕は「粋をはみ出して」生きていきたいですね。すこし粋をはみ出したところこそ新しいものが見える、と思うんです。僕もこういった日本風のまちおこしに傾倒したのは最近で、昔は「マンションには和室なんていない!!」なんて思っていたこともあるんです。これからも、あまり昔の考えや常

識に縛られず、すこし粋をはなれて、物事を考えられたら幸せですね。

からほり倶楽部を中心として、からほり町アートの開催、商店モールの開設、そして直木三十五記念館で完成した空堀地域のまちおこし。しかしその先は、まちの人々や企業、そして行政といったまちの主役だけが進めるステージなのであろう。数あるまちおこしの中でも、誇りを取り戻すはすが目先の手段や目標が、大局的な目的「誇りの回復」を失わせてしまう場合があまりにも多い。我々はもう一度、からほり倶楽部にみる、「いつかは役割を終える灯台」としての組織の重要性を見直すべきなのではないだろうか。



商業施設“練”

